黒人の英語と言語の自然性

小　林　泰　秀

Black English as a Natural Language

Yasuhide KOBAYASHI

Abstract

This paper discusses the characteristics of Black English and tries to find out its origin. Black English originated as a pidgin language in West Africa, and there may be seen in its development much of the linguistic phenomena involved in the process of a nutural language.

1. はじめに

アメリカには非標準英語と言われる黒人英語があり，それは標準英語とはかなり異なるものである。黒人の英語を知らない教師が，黒人の多い小学校，中学校，高等学校で直面する最初の，そして最大の問題は言葉である。それは日本で，標準語だけ話すある教師が，例えば東北地方のある山村でとまどう言葉の問題とは比較にならない程強いものである。教師が黒人の生徒を標準英語が話せるようにすることはほとんど不可能である。

なぜ黒人は標準英語が話せないのであろうか[1]。言語能力に欠けているからだろうか。黒人の英語は，アメリカ英語の一つの方言と言えない程文法が異なっているのだろうか。黒人英語はどのようにして出来たものであろうか。以上のような問題を考えながら，この論文では黒人英語の起源，特徴を述べると共に，黒人英語が出来た背景に見られる現象が，いかに言語の自然性にかなったものであるかを議論する。又，黒人英語が確立された背景には，その特徴として当然言語に特有のものがあるはずであるから，言語に見られる自然性の立場からも，黒人英語の起源，特徴を探ってみる。

2. 黒人英語の起源

黒人が話す非標準英語がどのようにして出来たかには，大きく分けて二つの説がある。一

1）もちろん黒人であっても，白人と全く変らない標準語を話す者も多いが，この論文で問題にしているのは，南部や黒人居住地 (ghetto) に住む黒人を対象にしている。

つは，純粋に英語の一つの方言であるという英語起源説と，もう一つは，西アフリカの言語と英語が混って出来たピジン・クリオール英語起源説である。英語起源説は，東アングリア (East Anglia) 起源説とか初期英語起源説と一般に呼ばれているが，起源を初期の英語に求めるものと，特に初期の英語に求めず，現在アメリカ英語に色々な方言があるように，その基底が標準英語と同じである一方言にすぎないとするものとの二つに分けられよう。後者を英語方言説とし，この論文では初期英語起源説と区別して議論する。以上の三つの説の他に，アメリカへ連れて来られた黒人達が当初話していたピジン・クリオール英語が，白人の話す英語の影響を受け，又，白人の英語を話すことによって，黒人英語が変化して行ったという説が考えられる。この説を中間説と呼ぼう。これは，黒人英語と白人英語が互いに影響し合って黒人英語が出来，そして両言語に類似した面が見られるようになったのは，自然な姿であるとするものである。以上の四つの説を述べながら，どうしてこれら四つの説が考えられ得るのか，そしてどの説が最も有力となり得るのか議論しよう。

A. 英語方言説

アメリカの東部，南部，中西部など各地に方言があるように，黒人英語も一つの方言として考えられる。アフリカから奴隷として連れて来られた黒人は，彼らの白人の主人から英語を学んだ。しかし彼らは言語能力が低く，本来の怠惰性がある為，主人から学んだ英語を簡略にし，唇が厚いという肉体的相違も影響して，白人の方言には見られない彼ら独自の方言を創り出した。黒人英語には省略が多いが，それによって文の意味を把握するのが不可能になるものはなく，他の言語に於いては正しい文であるものが多い。

(1) 三人称単数

a. He believe God.

a. He don't like nobody.

三人称の現在動詞に s がないのは，日本語を見ても分るように，他の多くの言語に於いて意味上何ら必要のないものである。

(2) Copula の省略

a. He handsome.

b. I gonna do it.

Copula も意味上必要なものではないので省略している。しかし黒人英語でも次の c と d の例に見られるように，文末の be は省略出来ないし，短縮出来ない。

c. How beautiful you are. (*you. *you're)

d. Here I am. (*I. *I'm)

スワヒリ語のように随意的に省略出来るものもあるが，copula のない言語も多い。

e . Swahili : mimi (ni) mwanafunzi. 'I (am) a student'.

f . Sierra Popoluca : cabac heʔm kawah. 'It-is-red the horse'.
red the horse

yagac heʔm pʌ·šiñ. 'He-is-tall the man'.
tall the man

g . Lalana Chinantec : ʔwəh 'earth'. ʔaʔwəh. 'Is it land?' (ʔa は疑問形態素)

tɔʔ 'orange', ʔatɔʔ. Is it an orange?'

(3) 所有格

a . That John house. 'That is John's house'.

b . You know he sister? 'Do you know his sister?'

所有格は，なくても前後関係から，aの意味は That John is a house ではないし，bは Do you know he is a sister? でない事は容易に分るのであるが，You know he father? が Do you know his father? か Do you know he is a father? かは，その文だけ聞くと分らない事がある。しかし黒人英語では以外に冠詞，a, da が省略されないのである。従って You know he a father? となり，You know he father があいまいな文でなくなる。所有格がないのも黒人英語に限ったものではない。

c . Thai : nân bán Wiboon. 'That is Wiboon's house'.
that house

nân bán khun. 'That is your house'.
you

タイ語では名詞を修飾する語は後に来，「大きな家」は bán yài である。

d . Nupe : èyà egi mi. 'my child's friend'.
friend child I

Nupe 語には日本語のように格の屈折はなく，所有格を表わす為には nyą́ (of の意味) が使われることも多いようであるが，代名詞には nyą́ は使われない[2)]。

e . èya nyą́ egi mi. 'my child's friend'. (´ は高いアクセント，` は低いアクセントを表わす記号である)

f . sunạ u. 'his name'.
name he

更に Nupe 語では名詞句の後に来る代名詞は所有格であり，動詞の前の主格，動詞の次の目的格を語順に於いて区別する。

g . mi yébó u. 'I love him'.
I love he

2) Banfield の A Gramman of the Nupe Language Together with a Vocabulary からの資料による。

(4) 複数形

三人称や所有格と違って，黒人英語では複数形は良く用いられるのであるが，数量詞と共には単数形が用いられる。

a. He got five book.

黒人英語のように複数形を用いながら，数量詞と共には単数形である言語は他にもあり，日本語もある程度そうだと言える。

b. Isthmus Zapotec : biʔku 'dog', kabiʔku' 'dogs', čupa biʔku' 'two dogs'. (ka は複数形態素)

c. Japanese : 子供，子供達，10人の子供(達).

(5) 過去形

a. Yesterday he walk home.

その文が過去を表わす副詞（句）等と共に用いられていて，明らかに過去を表わす文である場合とか，次の文のように過去を表わす標準があれば，動詞は原形で良い。

b. The boy carried the dog dish to the house and put some dog food in it and bring it out and called his dog...[3].

更に Dillard は，黒人英語には非反復性 (non-redundancy) があり，いくつかの動詞のある文の中で，一つの動詞が現在か過去の標準を持っていれば良いと述べている。日本語も「ごはんを食べる時に手を洗った」のように現在形が使われるし，タイ語は時制がない。

c. Thai : khău maa (mûa-) waannní. 'He came yesterday'.
he come yesterday

khău maa wannní 'He comes today'.
today

khău (jà) maa prûngnní 'He will come tomorrow'.
tomorrow

jà は未来形と共に用いられるが，未来時制を表わすものではなく，未来に対する「見込み」の意味を表わす語なので，なくても間違いではない。nâenon〔nænɔn〕'surely' のような確実性を表わす副詞が語の最後に来る場合には省かれることが多い。

以上統語面の省略を述べたが，他の言語も例に挙げたように，黒人英語の省略はごく自然な現象である。黒人英語のみに求めるから省略と考えられるのであり，後でも触れるが，もともと黒人英語の文法を他の言語にも見られるような構造のものであるとすれば，つまり省略と考えずに基底構造に存在しないのが黒人英語だとすれば，その起源が英語以外の言語にも求められる可能性が出て来るのである。

---

3) Dillard, Black English, 413ページ。

省略は音韻の面でも多く見られる。特に子音群の場合の省略が多い。

(6) 子音群

a. [tou] 'told, toll, toe'.

b. [mɛn] 'meant, mend, men'.

c. [hɛp] 'help', [mɪk] 'milk', [mɪ] 'mils',[tɛs] 'test', [lɪf] 'lift', [kaɪn] 'kind'.

a, b, c の規則は次のようである。

1. [+alveolar]⟶ϕ/C——

2. l ⟶ϕ/V——

Burling (1973年, 124ページ) は, 語尾の子音の消去は, 西アフリカの言語では子音が語尾に来ない為, その傾向が今日の黒人英語に影響を与えていると述べている。彼の意見が正しければ, 次の d と e の例のように白人の方言にも多く見られる子音の消去は, 黒人英語の影響を受けたからだと考えられよう。しかし次のような発音は, 黒人英語には関係なく, 普通に話す文の中で当然起こり得る言語の自然な変化とも云えるのである。

d. Brooklyn, New York : [ɪzn] 'isn't', [mayl] 'mild', [ɪgzækli] 'exactly', [smɔ] 'small'.

e. Columbus, Ohio : [wʊn, uʌdn] 'wouldn't', [bɹagkæs] 'broadcast', [dɪfən] 'different'[4].

黒人は怠惰である為, 英語の発音の f を p, v を b, θ を t, ð を d のように云い易くしてしまうというのは正しいだろうか。次に黒人の発音をみてみよう。

f. [kʌp] 'cuff', [pʌp] 'puff', [geb] 'gave', [breb] 'brave'.

g. [obəsi] 'oversee', [nebə] 'navel', [kʌlbət] 'culvert', [kænbəs] 'canvas'.

h. [tī] 'thin', [tɔndə] 'thunder', [di] 'these', [dɛ:] 'there'.

以上の例から, 黒人英語では摩擦音を破裂音にしてしまうようであるが, 必ずしもそうではない。

i. [vəmɪlɪən] 'vermilion', [vəliz] 'valise'.

j. [fʌst] 'first', [fa:n] 'find', [brekfəs] 'breakfast', [dɪfən] 'different'.

k. [gi] 'gave', [fa:] 'five'.

v は語頭で変化しないが, 語中, 語尾で b に発音されるようである。

l. v⟶b/[+syllable]——

語尾の子音が消去される k の例では, [giv] の v が消去されるのか, l の規則が適用さ

4) d と e の例は, Schokey の Phonetic and Phonological Properties of Connected Speech からのものである。

れてから [gib] の b が消去されるのか分らないが，規則の少ない方が適当であるので，l の規則は適用する必要がない。従って l の規則は次のように黒人言語の間でも異なる。

m．v⟶b/[+syllable]——([+vocalic])

j の例で f は語頭と語中では変わらないので，f が p に発音されるのは語尾に於いてである。θ と ð は，語尾に来ると f と v に発音される。

n．[tuf] 'tooth', [mauf] 'mouth', [truf] 'truth', [briv] 'breath', [smuv] 'smooth', th の発音は次のようになる。

$$\text{o.}\ \begin{bmatrix} +\text{anterior} \\ +\text{coronal} \\ -\text{continuant} \\ -\text{strident} \end{bmatrix} \longrightarrow \left\{ \begin{array}{l} [-\text{continuant}]/\text{——}[+\text{syllayle}] \\ \begin{bmatrix} -\text{coronal} \\ +\text{strident} \end{bmatrix}/\text{——}\# \end{array} \right\}$$

北部の白人でさえ，教養のない者は良く [kʌlbət] 'culvert', [rɪbət] 'rivet' と，v を b に発音するようである[5]。

発音はもちろん云い易い方向に変化をする場合が多いのであるが，黒人英語の破裂音化は見られない場合もあり，容易な発音にしてしまったとは云えない。又，摩擦音を破裂音に云い易いからすると云うのは，日本語の p→Φ, h とかグリムの法則 (Grimm's law) の p→f, t→θ, k→x などをみても分るように，一概に云えないことである。但し，黒人英語に於いて f, v が p, b に，θ, ð が t, d に発音されるのは，幼児の言語習得段階に於いても見られるように，後者の方が云い易い為，黒人は音韻特徴の似ている口控で隣接する発音に置きかえるようである。それは，まだ摩擦音の f, v, θ, ð を習得していないから破裂音に置きかえる幼児の場合とか，その発音がないから自分の言語に存在する発音に置きかえる場合（日本語で f→Φ, v→b, θ→s, ð→dz）とは違う。黒人は生まれつき言語能力が低い為，言語の習得してない幼児のような言語を話すと云うのは，黒人に対する偏見であり，後で述べるが，黒人英語の歴史を調べることにより，幼児語と似たもの，あるいは，英語以外の言語と似たものが見られて当然なのである。黒人英語が幼児語と似ている文を述べてみよう。

	幼 児 語	黒人英語
p．三 人 称	John build house.	John drink the milk.
q．二重否定	Nobody don't like me.	You don' get no more from me.
r．疑 問 文	What he want?	How he learn you?
s．所 有 格	Where Ann pencil?	Dat he book? Yes, it his. *Yes, it he.
t．主　格	Why not me touch the fish?	Me help you?
u．未 来 形	He bite you again.	She leave at seven tomorrow morning.

5）Wise, Negro Dialect の219ページ。

以上の文を比較して見る限り，黒人は幼児のようであると云っても良い程似ている。しかし，似ているから幼児のように未熟だとは云えないし，後で述べるが，黒人英語は標準英語と同じく複雑な言語なのである。p の例文は三人称 s のつくべき文であり，幼児語では過去時制も初期にはないのであるが，黒人英語には I drunk the mik という形もある。q の文は二重否定の文であるが，白人の英語にも良くみられる文である。r の文に於ける do の欠落は，You know that? のような文にも見られるように，黒人英語に限ったものではない。s の例文に見られる所有格については前にも触れたが，Dat he book? 'Is that his book?' に対する答は，Yes, it his. であり，Yes, it he. でない所に幼児語とは違う面がある。u の文の未来形に於ける will や shall の消去は，白人でも未来を示す語句があり，明らかに未来がはっきりする文に於いては省略するのである。

白人と同じ英語を基底にしていながら，白人とは違う言葉を話す黒人は，言語能力が欠けており，彼らの言語体系に限界があり，言語習得以前の幼児のように不完全な言葉を話すというのは，白人が黒人を人種差別した論理の上に立って述べたものである。確かに黒人は，白人と同等の教育を受けない者が多い為，読み書きの出来ない者もいる。又，学校では，例えば Ask him can you use the hat. が間違いであるからといって，Ask him if you can use the hat. と正しく書くように教えても，ほとんどの者は出来ないだろう。これは彼らの言語能力が低い為ではもちろんなく，話す能力と書く能力とは全く別のものであると同時に，黒人英語の文法体系が標準英語のそれと異なることにある。黒人英語が方言か一つの言語かというのは，後で結論づけるが，黒人英語をアメリカ英語の一方言として考え，白人との相違を怠惰や言語能力に求めるのは，黒人英語の存在を否定すると同時に，黒人と白人のみならず，あらゆる人種は基本的な知識や言語能力が全く同じであるという根本的な言語理論をも否定することになる。これまで述べて来た例文を見て，黒人英語は標準英語よりも話しやすく，理解しやすく，覚えやすいと考えるのは間違いである。黒人英語を話せるようになるには，新しい言語を学ぶのと同じ労力が必要なのである。黒人は単純であるから，単純な解り易い英語を使うというのは偏見である。人間が話している世界の言語で，より単純である言語というのはなく，同じように単純であり，同じように複雑なのである。

B. 初期英語起源説

黒人が話している英語は，初期のイギリスからのアメリカ移民から学んだもので，白人がかつて話していた一方言（古語）を，白人が話さなくなった今日でも話しているというのが，初期英語起源説である。これは黒人英語の特徴をイギリス地理方言の中に求めるものであり，東アングリア起源説とも呼ばれ，イギリスの東アングリア (East Anglia) からの移民の言葉が黒人英語だというものである。次に，初期の英語の方言と黒人英語の似ている点を

挙げ，それがいかに偶然で，無理に結びつけたものであるかを述べよう。古語の例は年代がめちゃくちゃであるが，とにかく黒人英語に見られるものを無理に拾ってみた。

(1) 人称，数，時制

a. He do it.

b. I have two book.

c. I meet him yesterday.

aの文では三人称単数現在動詞に s がつかず，bの文では名詞が複数形になっておらず，cの文では意味上過去の文であるのに動詞が現在時制であり，これらが黒人英語の特徴であることはすでに述べたが，a，b，cの例文は東アングリア方言にも見られたのである。前にも述べたように，a，b，cのような文は，東アングリア方言の影響というよりも黒人英語が出来た当初からの文法と考えたい。その文法が出来た背景には，意味伝達に不必要なものの消去とか西アフリカ諸語の影響があったかも知れない。何よりも東アングリア方言を黒人が話していると云えない理由は，黒人に英語を教えた白人が東アングリア方言を話していたということと，彼らが東アングリアからの移民であったということが，疑問であるからである。

(2) 継続相の be

イギリス系アイルランド方言には進行を表わす be がある。

a. He be working. 'He is working every day.'

黒人英語にも継続相の be がある。be のない ing は一時的であるのに対して，be ing は継続的である。

b. { She studyin' when de teacher come in.「彼女は先生が入って来る時には勉強している」
She be studin' when de teacher come in.「彼女は先生が入って来る時も勉強している」

c. { John ain' workin' now.「ジョンは今働いていない」
Jonh don' be workin' every day.「ジョンは毎日働きはしない」

黒人英語の be は継続の意味と同時に，永久性の意味も含んでおり，形容詞だけでなく名詞も be の次に来れる。

d. { My mother sick.「私の母は最近病気になったが長期間の病気ではない」
My mother be sick.「私の母は長い間病気をしている」

e. { She my good friend.「彼女は今は私の良い友達だ」(一時的)
She be my good friend.「彼女は今後もずっと私の良い友達だ」(永久的)

d, e のような例は黒人英語に特有なものであり，この be は古語の影響というよりは，黒人の言語に継続的，永久的な意味を持つ be が存在しており，それが be ing の形に関しては，たまたまイギリス系アイルランド語と似ていると考えられる。

(3) done

スコットランド英語には have＋done＋動詞という形がある。次の例は Dillard (1972年，227ページ) からの引用である。

b. The lork has done the mirry day proclame.
(lork＝lark, mirry＝merry, proclame＝proclaim)

b. How that my yowth I done forloir.
(yowth＝youth, forloir＝forlore＝forlese 'to lose' のpp.)

c. As I afore have done discus.
(afore は before の意味，discus＝discuss)

bの例文のように have のない場合もある。Dilland によるとスコットランド語は，cの例文で時を表わす afore が使われ得るように，近接完了を表わしたのではなく，ほとんどの場合使役を表わしたようである。それに対して黒人英語には近接完了の意味がある。

d. Missy, Mr Seldreen done come, he dere at the door, I shall... (Dillard, 1972年，220ページ)

Dillard は否定しているのだが，Labov (1972年) によると，done には「すでに」の意味 (例文 e) や強調の意味 (例文 f と g) もある。次の例文は Labov から引用したものである。

e. She done already cut it up. (55ページ)

f. After you knock at the guy down, he done got the works, you know he gon' try to sneak you. (55ページ)

g. I forgot my hat! I done forgot my hat! I done forgot it! (56ページ)

done の形は南部では黒人のみならず白人も用いる。

h. I done gone/went dat city.「私はあの町へ最近行って来たよ」

更に南部の白人には have を使う文もある。

i. I've done gone/went to that city.

黒人の下層階級では done＋原形もあるようである。以上のように done＋動詞は，形の上ではスコットランド語と似ているのであるが，意味的には全く似ておらず，黒人英語の done は古いイギリス方言の影響を受けたものであるとは云えない。むしろ黒人英語が白人に影響を与えて，南部方言として使われていると思われる。そして標準英語の文法に合わない為，白人は i の例文のように have＋過去分詞の形にして使ったが，黒人英語では have＋

done がないので，両言語の間に相違が出来たと考えられる。更に Dillard (1972年) は，アイルランド英語に done＋動詞形が存在するという証拠さえなく，黒人英語の done と関係づけようとすることは，アメリカ形式をイギリス諸島から出てきたものだとしてしまおうという表れだと述べている。

次に黒人英語に見られる文体で，古語に見られるものをいくつか拾ってみよう。

(4) 比較級と最上級

エリザベス王朝時代には二重の比較級と最上級があった。次の引用文 a と b は，「現代英語学辞典」(284ページ) からのものである。

a. More fitter for Paris than Hector (J. Lyly, Euphues)/How much more are yee better then the foules? (Shakespeare, Julius Caesar)

b. the most unkindest cut of all. (ibid.)/after the most straitest set of our religion. (The Authorized Version of the Bible, Luke xii, 24)

同じような例が黒人英語にも見られる。

c. I know mo' puttier girl. 'I know more prettier girl'.

d. de mos' biggist buildin' I ever seed. 'the most biggest building I (have) ever seen'.

古語に一時期使われた二重比較の形が黒人英語に引き継がれているとは考えにくい。比較には more, most を使う形と，形容詞＋er, est を使う形があり，その両方を一つの文に使うのは二重否定と同様当然あり得る現象である。

(5) for to

Old English や Middle English には良く for の加えられた for to の形が見られる。歴史的には方向を表わす to の原義が薄れた為，それを補うのに for を添えることになったのである(新英文法辞典，546ページ)。変形文法で Equi-NP Deletion (同一名詞句削除)の後，Complementizer (補文化要素) の for が削除されないで残っていると考えられるのとは違う。

a. What went ye out for to see? (The Authorized Version of the Bible, Luke vii. 25. b) (現代英語学辞典，287ページ)

黒人英語にも同様の形がある。

b. I got sumfin' fer ter tell you. (Harrison, 172ページ) 'I got something for to tell you'.

簡略，省略の多い黒人英語に for to があるのは不自然であり，白人方言の影響を受けたからであると考えられるかも知れない。このことについて Stewart (1975年，235ページ)は，

解放後生まれた黒人はめったに使わなくなったが，不定詞として使われていたクリオール語の for を消去せずに，クリオール語でない to を加えた為，for to の形が出来たとしている。少し長いが Stewart の文を引用しよう。

……it is likely that the *for to* infinitives of some Deep South Negro dialects are the result of incomplete de-creolization (the adding of non-creole *to*, without giving up the creole *for*), rather than the borrowing of a white non-standard dialect pattern, as some might suppose. In the first place, such white dialects (Appalachia, Georgia, etc.) usually have a contrast between *to* and *for to* e.g. *I come to see it* (i.e. 'It dawned on me') vs. *I come for to see it* ('I came in order to see it') while many Negro dialects in which *for to* occurs do not make such a distinction. In the second place, there is piecemeal evidence of the addition of *to* after *for* along the South Atlantic coast, where the change has been relatively recent. For example, in *Drums and Shadows: Survival Studies Among the Georgia Coastal Negroes* (Athens, Ga., 1940: 144) a team of the Georgia Writers' project interviewed an old lady (then approximately one hundred years old) who, speaking of an African-born slave whom she knew in her youth, recalled "I membuh he say 'Lemme cook sumpm fuh nyam.' He mean sumpm fuh to eat."

The Authorized Version of the Bible などの古文体に於いては，-(e)s に相当する -(e)th (hath, hopeth, sitteth, doeth など) が人称に関係なく見られ，Old Northumbrian や Modern Scotch では何人称の動詞でも -s がつくと云われるが，黒人英語とは関係がないであろう。前述のように黒人英語では普通 -s はつかないのであるのに，he lʌvz, she lʌvz というのは標準英語の影響を受けた為であり，更に一人称，二人称にも I lʌvz, you lʌvz と -s をつけて云うのは，過度の修正 (overcorrection) とか過剰修正 (hypercorrection) と云われる現象である。たとえ三人称単数動詞にだけ -s がつくと教えられても，それを知るのがむづかしく，-s を三人称単数現在形にだけ限定することが出来ないので，すべての動詞に -s をつけるのである。

(6) 音韻

黒人英語の発音に古語の発音が残っているのだろうか。黒人英語と古語の間には似た発音は見られるのだが，それは無理に関係づけようとした場合である。

$$a\ .\ a \longrightarrow \begin{Bmatrix} au \\ aw \end{Bmatrix} /\text{——}N$$

黒人英語：dawnse 'dance', Middle English : daunse(n).

黒人英語では鼻音の前では Nauncy, awnt のように [æ] が [au] に発音されやすく，古語の影響ではない。awnt は Old English では æmete である。

b . u⟶o/——N

黒人英語 : ontie, Old English : ontie.

黒人英語では [ʌ]がやはり鼻音の前で [o] に発音されるが，黒人英語の hongry 'hungry' は Old English では hungrig であるように，これは黒人英語の規則である。

c . $\phi \longrightarrow h / \begin{cases} \#\text{——} \\ \text{——}\# \end{cases}$

黒人英語 : hit 'it', Old English : hit.

黒人英語でたまに語頭に h を挿入して発音する。日本語では [ʔakai] のように，特に語頭（時には音節の初め，あるいは語尾）に母音が来る場合は声門を閉鎖してから発声するが，英語では声門を開いたまま肺からの空気を口の外に出すので，黒人が hain't のように，語頭に h を挿入して発音するのは自然な現象である。更に語尾に於いても空気を出し続けると，[rensh] 'rinse' のように h が発音されたりする。rinse は Middle English で rinse (n)，もしくは rince (n)である。

d . th⟶d

黒人英語 : fader, Old English : fæder,

チョーサー，スコットランド方言 : fader.

黒人英語では語中の th は t, d に発音されるが，Old English でもそうである訳ではない。次の B. E. は Black English, O. E. は Old English の略語である。

dis (B. E.)–this (O. E.), wid (B. E.)–with (O. E.), furder (B. E.)–furthor (adv.), furthra (adj.) (O. E.)

e . sk⟶ks の音位転換

黒人英語 : ax 'ask', Old English : āxian, acsian

sk が ks になる音位転換は，幼児語には良く見られるように云い易い為であって，Old English 等の影響の為とはとても考えられない。日本人の幼児も次のように音位転換をする。

kissen「石けん」（2才3ヶ月），akušuumu「アイスクリーム」（2才4ヶ月），okasana「お魚」（2才6ヶ月），kučite「つけて（ちょうだい）」（2才8ヶ月）。

非常に無理なやり方で黒人英語の特徴を初期の英語に求めてきたが，もし初期の英語の特徴を黒人英語が受け継いでいるのであれば，アメリカ南東部の住民のほとんどは，以上述べたような古語の方言を話す地方からの移民ということになる。実際にはイギリス方言に見られる文法と黒人英語の文法は一致しないのであるから，黒人英語がイギリス英語の古い特徴

を維持しているというのはおかしい。この説は白人の英語から黒人が自らの言語形式を取ったという，いわば黒人英語の起源をイギリス英語に求めるイギリス英語至上主義の立場に立つものである。Aの英語方言説とBの初期英語起源説の二つの説を述べてきたが，これらの説は黒人英語をアメリカ英語の一方言として扱い，白人と黒人の言語の相違はその基底の構造にあるのではなく，同じ言語，つまり英語内の表層上の相違にすぎないとするものであり，これらの説は広い意味でのイギリス英語至上主義の立場に由来していると云える。

C. ピジン・クリオール英語説

西アフリカへ進出したヨーロッパ人は，そこの住民と話せる言葉，つまり違う言語を話す人々と伝達出来る言葉が必要であった。屈折変化や不規則変化がなく，文法上単純化された媒介としての言語，つまりピジン語が話されるようになった。奴隷達は色々な言葉を母国語として話していたのであるが，主人と話す時とか，他の奴隷達と話す時にはピジン語を話す必要があったし，どちらかというと自分の母国語の方にその文法体系の似ているピジン語を覚えるのは，英語を覚えるよりずっと容易であったろう。ピジン語は，次の世代には母国語として習得され，クリオール語となるのである。

16世紀半ばに奴隷貿易を含む西アフリカの貿易に英国人が参加して，やはりピジン英語が話されるようになったが，その語彙はほとんど英語からのものであり，文法体系は英語とは異なったピジン英語特有のものがあった。そのピジン英語がアフリカ諸語の影響を受けたことは確かであるが，どのアフリカ語と英語が混って出来たのかはこれまではっきりされていないし，はっきり証明づけることは不可能であろう。アフリカの諸語と黒人英語は似た面が多いが，それは何もアフリカの言語に限ったことではない。ピジン英語が話され，それがクリオール化して行くにつれ，黒人英語独自の文法が確立され，それが世界の言語と似た面があるのは当然のことである。奴隷や貿易に携わる者は，自分の母国語では通じないので，どうしてもピジン・クリオール語を話さなければならなかった。

黒人英語は統語の面で標準英語とかなり異なる。まず，Ficket (1975年，86-88ページ) から黒人英語の時制を引用しよう。黒人英語には四つの過去の度合を表わす形と，二つの未来の度合を表わす形の合せて六つの時制 (Ficket は tense と呼んでいる) がある。否定文が存在するものはその否定文も引用しよう。

a．現在から過去へ

現在	肯定文	She singing. 'She's singing right now'.
	否定文	She nòt singing. 'She's not singing right now'.
		She $\overset{\varepsilon}{\text{a}}$int singing. 'She's not singing right now'. (ε はそこを強調して発音するの意味。ε は emphasis の肩文字)

(1) 起　動 (Inceptive)　肯定文　She dò sing. "She just started to sing'.

否定文　She dòn't sing. 'She hasn't started to sing yet'.

(2) 前現在 (Pre-present)　肯定文　She did sing. 'She just finished singing'.

(3) 近過去 (Recent)　肯定文　She done sung. 'She sang recently'.

否定文　She aìn't sung. 'She hasn't sung recently'.

(4) 遠過去 (Pre-recent)　肯定文　She been sung. 'She sang a long time ago'.

b．現在から未来へ

(1) 直前未来 (Imminent)　肯定文　She's a-sing. 'She will sing momentarily'.

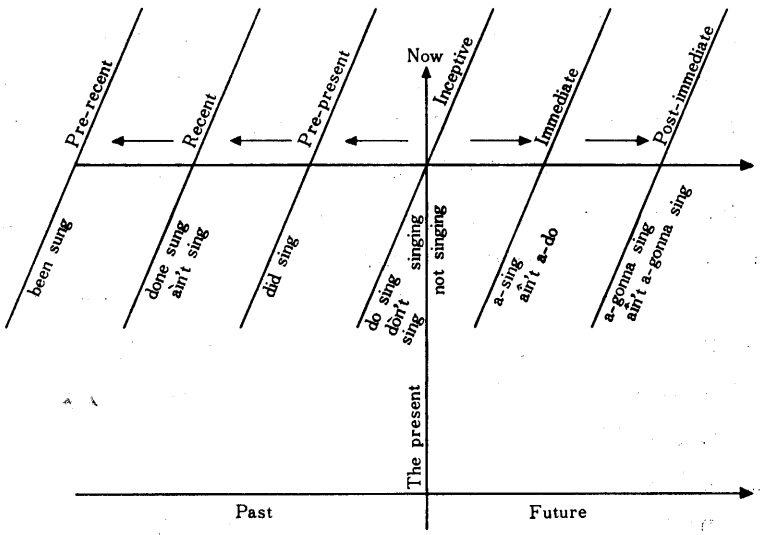
否定文　She aîn't a-sing. She ain't a-sing. ,She won't sing right away'.

(2) 後直前未来 (Post-imminent)

肯定文　She's a-gonna sing. 'She will sing soon'.

否定文　She aîn't a-gonna sing. She ain't a-gonna sing. 'She won't sing soon'.

以上の時制を Fickett は次のように図にまとめている。(89ページ)



更に黒人英語は強勢 (stress) によって次の意味が異なる。

c．{The bell dòn't ring. 'The bell hasn't stated to ring'.
　　{The bell dônt ring. 'The bell doesn't work'.

又，近過去の否定文か，一般的な過去の否定文かは，ain't と共に用いられる動詞による。

d. {She ain't sing. 'She hasn't sung recentely'.
She ain't sung. 'She didn't sing, hasn't sung at any time in the past'.

be-ing の進行形も標準英語とは異なる。

e. {She singing. 'She's sing singing right now'.
She be singing. 'She is singing every day (a long time)'.

f. {She been sung (sing). 'She sang a long time ago'. (瞬間的)
She been singing. 'She was singing a long time ago'. (進行的)

以上の例からも，黒人英語にしかない文法が存在し，黒人は無学である為に悪い非標準英語を話すというのは，全く黒人を差別した意見だということが分る。黒人英語の起源が純粋に英語に由来するとするならば，以上のような意味を含む文がどのようにして出来たかの説明が必要となる。イギリス方言でもなく，時代の流れにつれての，又，ピジン英語が出来る際の，当然予測出来る言語の自然な変化によって出来たと思われない文が黒人英語に存在することを考えると，黒人英語の起源を西アフリカに発達したピジン・クリオール英語に求め，西アフリカ諸語の影響があると考えるのは当然であろう。表層の構造に見られる相違は，単に同一国語内のものにすぎないとも考えられようが，意味に相違があるのは，その言語の文法が異なるからである。黒人と白人は特に南部ではかなり似た英語も話すのであるが，両語の出来た過程が歴史上異なるのである。アメリカ黒人英語と，ジャマイカの英語と，他のカリブ海の島々や南カロライナ海岸地方やその島々で話されるガラ英語 (Gullah)，更には西アフリカの黒人英語との間には多くの類似性が見られることから，これらの英語は同じ起源を持つと考えられる。人間は他の場所へ移住する際に，必ず自己の言語を持って行くものであり，黒人英語にも多くのアフリカ語を語源とする語が存在している。

g. banana「バナナ」, chimpanzee「チンパンジー」, safari「サファリ」, goober「なんきん豆」, jazz「ジャズ」, banjo「バンジョ」, sweet mouth「うまい口」, bad mouth「悪口」, yard ax「未熟な牧師」

もともと黒人のスラング (slang) であったのだが，白人間でも云われるようになった言葉も多い。

h. cool「すてきな」, light「おろかな」, dig「分る」, right on「全くその通り」, up tight「緊張した」。

まだ白人の言葉にまで普及していない黒人英語までまねようとする者が増える傾向にあるのは，白人の中に黒人英語，更には黒人，黒人文化を理解しようとする者が増えてきていると同時に，黒人英語を話したり，まねしたりすることにそれほど抵抗を感じなくなった為で

あろう。黒人英語を話す白人が増えつつあると云っても，それは語彙とか慣用句をまねるのであって，黒人英語の文法までもまねようとする白人はほとんどいないし，黒人英語の文の意味を理解出来ない以上，それは不可能である。ピジン・クリオール英語説は，AとBで述べた説に比べればはるかにすぐれた，言語の本質的な立場から黒人英語の起源を追求しているのであるが，クリオール化された当時の言葉を黒人が現在もその通り話しているかは問題である。

D. 中間説

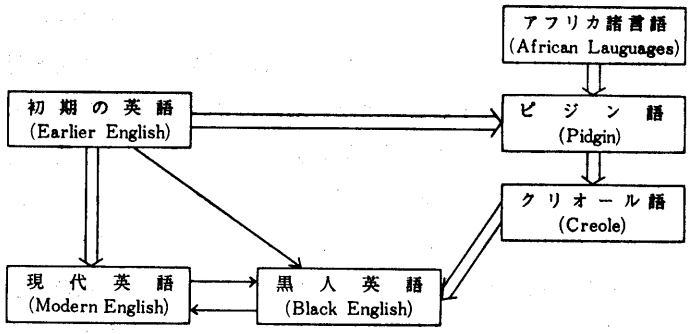
中間説という言葉を Dillard の *Black English* の訳者，小西友七氏は「訳者のあとがき」の中で，「中間説は，一口に云えば，相互影響によるものということになりますが，影響力の大小に応じて，東アングリア派寄りのもの，クリオール派寄りのものとあり，それにいろいろな段階のものも考えられましょう」と説明している。黒人英語の文法体系はピジン・クリオール英語によると云っても，アメリカに連れて来られた黒人が，現在の標準英語の源をなす初期英語を話していた，当時の白人の影響を強く受けたことは確かである。だからと云って，初期の英語にその起源を持つ標準英語には失われた古語が，黒人英語に存在しているというのは，Bの初期英語起源説の所で述べたように，賛成出来ない。もし存在しているとすれば，アメリカの白人の方言に存在しているものより，はるかに少ない数が存在している。それは，白人英語は初期の英語に直接由来しているので，いろいろな方言に古い英語の特徴が見られるのは当然であるが，黒人英語はクリオール化された英語にその主な起源があるので，標準英語程初期英語の影響が少ない為である。

現在では黒人は脱クリオール英語の傾向にあり，テレビ，ラジオの普及と共に標準英語の影響を強く受けて変わりつつあるが，今でも黒人の多い学校では標準英語を教えるのに苦労している。

黒人が白人の英語の影響を受けると共に，白人も又，アメリカ全土に散らばっている黒人英語の影響を受けるのは当然であり，お互いに影響し合っていくと，白人の英語と黒人英語の間に相違点よりも類似点が多く見られるようになる。従って，両言語間の相違は単に表面的なものであると考えられるようになり，黒人英語の特徴を述べ，相違点を強調するのは，黒人英語の全体をとらえていないからだと思われるかも知れない。黒人英語も標準英語もその最初の起源は，直接，あるいは間接的に初期の英語にあり，しかもアメリカに於いては，長い間共に影響し合ってきたのであるから，似ているのは当然である。世界のどの言語をとっても，その両言語間には，深層的な意味では相違点より類似点のほうが多いであろう。まして黒人英語と英語についてはいわんやである。お互いに影響し合うと同時に，歴史的変化も加わって黒人英語が出来たと考えるのが最も自然と思われる。それを黒人の怠情，知性の

低さと考えるのは偏見である。

黒人英語の由来は次のようになる。



結論としては，上の図に見られるような，初期の英語説とピジン・クリオール説の中間の説，つまり，どの線を通ってと云うのではなく，言語が互いに影響し合って，黒人英語が出来たという説が最も自然のように思われる。

3. 方言か言語か

黒人英語がピジン・クリオール英語の影響を一番強く受けていることを述べたが，アメリカ英語の一方言にすぎないのか，アメリカ英語とは別の独立した一つの言語なのかという問題をここではっきりさせたい。

標準語，非標準語という言葉を用いる際，「非標準語」とは，くだけた云い方とか，方言という意味に用いられるのであって，一つの独立した言語を非標準語とは云わない。Where you going? とか，What you doing? とか，更に，Whatcha doin'? という非標準語的な云い方は白人でも黒人でもする。しかし，ここには白人と黒人間の言語認識の相違がある。白人はくだけた話を友達と話す場合，上の文のように be 動詞を省略しているが，黒人のは省略ではなく，彼等の基底の構造に存在しないのである。少くとも黒人にとっては，上の云い方はくだけた云い方ではない。しかし，ある白人にとってはくだけた云い方であるが，ある白人にとっては自分の生まれ育った方言かも知れない。方言であれば，その地方では目上の身分の高い人に対して上の云い方をしても失礼に当らないし，その身分の高い人も同様に話しているだろう。そこの方言は黒人英語と同じ基底構造を持つようである。しかし，両語は歴史的に大いに異なるのである。白人のは英語を簡略にして云ったのが，(もしそういう方言があるとすれば）その方言になったのであり，黒人のはピジン語が出来た時，意味伝達に影響がない不必要な要素である英語の copula である be が消去され，その文法が黒人英語として確立されたのである。

このことに対して Burling (1973年，73ページ) は，黒人の非標準英語 (Black nonstandard English) は，標準英語から分離した一つの言語とは云えない。両言語の相違は表面上のものであると述べている。彼の例文は Standard English と Nonstandard English の比較によるものであって，Nonstandard English を黒人英語と白人英語にはっきりと分けることによって，黒人英語の特徴をより明確にすることはほとんどしていない。実際にはBurling の考えとは逆に，相違あるように見えるがより深く黒人英語を調べていくと，互いの文法が異なることが分るのである。黒人も，She be singin'. 'She is singing every day' とか She been singin'. 'She was singing a long time ago' のような，前に黒人だけのものとして述べた文をだんだん云わなくなってきたようであるが，黒人の特徴が，省略，語彙，発音等の面にあり，統語の面になくなれば，黒人英語は英語の一方言のようなものと考えられるかも知れない。しかし，黒人英語には，標準英語にない，又，標準英語で表わせない独自の文法があるのである。もちろん標準英語にない，複雑な表現をするからと云って，独立した一つの言語とは云えない。雪の多く降る地方では，雪の種類によって語彙が色々豊富にあるだろうし，漁師の間では潮の流れによって色々な云い方があるだろう。しかしこれは，生活上の必要性から出てきたのであって，新しい文法を創造したことにはならない。同じ日本語でも青森方言と鹿児島方言とではお互いに理解することが出来ない。琉球方言となると全く外国語のようである。それは主に語彙が異なっているのであり，基底の構造に相違がない。次の文は津軽方言であるが，文法構造が同じであるのが分る。

a．オメ　オラノオジ(コト)　フタイタベ。

(君は　僕の弟を　　たたいたね)

同一言語での方言には，語彙，発音のみならず文法の相違もあるのであるが，簡略からのものとか語彙上のものであり，基底の文法構造そのものが異なる訳ではない。「借りる」は広島方言では語幹が違い，過去形と否定形は次のようになる。

b．広島方言：kar-ta⟶katta, kar-an⟶karan

標 準 語：kari-ta⟶karita, kari-nai⟶karinai

方言とは，もともと同一言語であった国語が，地方に於いて独自の発達をした為，語彙，発音，文法に於いてその言語と多少異なるようになったものである。所が黒人英語は，アフリカ諸語が混っており，方言ではなく，英語とは別の言語と考えられる。

4．言語の自然性

歴史上の変化に加え，ピジン・クリオール語をその主な起源とする言語には，言語の普遍性というような，人間言語の自然性に従う変化があちこちに見られる。文は名詞句と動詞句

から成り立ち，動詞句は動詞と目的語である名詞句から成り立つというような規則は，その句や語の順序はまちまちであっても，普遍的なものであり，どの言語にも見られるのである。しかし，その句構造規則は各言語によって異なる。例えば，英語では VP→be+Adj/NP/PP という規則があるが，黒人英語では be がなく VP→Adj/NP/PP である。これは前にも再三述べたが，copula の be はなければならないものではない。三人称の規則も黒人英語にはないものであり，ピジン語で適用されなかったのが自然であろう。英語にはあるけれども，黒人英語にはないと思われる規則も，実際には基底にあるのだが，表層に現われないものもある。例えば過去形とか複数形である。She sin' yesterday. とか I have ten book. と云いながらも，彼らの脳には She sing+Past yesterday と I have ten book+Plural があり，それが sing+ϕ と book+ϕ として表層に現われるのである。Tense$\longrightarrow\begin{Bmatrix}\text{Present}\\\text{Past}\end{Bmatrix}$ とか NP$\longrightarrow\begin{Bmatrix}\text{Singular}\\\text{Plural}\end{Bmatrix}$[6] という特徴はどの言語にも云える普遍的なものであり，それが表層上ゼロ形態素 (zero morpheme) として扱われるのは，ごく自然な現象である。これは標準英語の sheep, deer などに見られるようなゼロ異形態 (zero allomorph) とは違う。ゼロ異形態の場合はたまたまその複数形がないのである。

黒人とか白人にかかわらず，英語を話す人間なら当然適用するだろうと思われる規則は，音韻の面で多く見られる。

a. $V\longrightarrow\phi/\begin{bmatrix}+\text{mid}\\-\text{stress}\end{bmatrix}$ ——

pǽnkeɪk→pǽnkek, poutéɪtou→potéɪto, bóuldfeɪs→bóuldfes.

一層くだけると強勢に関係なく中舌母音の後の母音が省略される。

b. $V\longrightarrow\phi/[+\text{mid}]$ ——

blou→blo, roud→rod, pouteɪtou→poteto, bouldfeɪs→boldfes, peɪpər→pepər.

更に，黒人英語では，語尾の子音と流音が省略される為次のようになる。

rod→ro, boldfes→bodfes, bepər→pepə.

白人も黒人も二重母音を単音に発音しており，それが特に無声子音の前で顕著に見られるのは，母音が有声子音の前では長母音に，無声子音の前では短母音に発音されるのと同じように，声帯振動の長さに関係する英語に共通した現象である，bの規則や，長母音が短母音に発音されるのは，ookii→oki「大きい」, hoomuruumu→homurumu「ホームルーム」, seinen no ie tooi→senenoetoe「青年の家（は）遠い」のように日本語の方言にも見られる。

6）言語によっては Present と Past ではなく，±Past で表わした方が良いものとか，Present と Past 以外の，例えば未来時制の考えられるものもあるだろうし，複数形にしても，両数と3以上の数に複数形が区別して用いられる言語もあるのだが，時制とか数という概念は人間言語に普遍的なものである。

又，強勢のある母音ははっきり発音するが，強勢のない母音はさほど重要でない英語では，舌の位置が中間になり，白人英語も黒人英語も suhwa [ə] に発音される。

c．[−stress]⟶ə

hámbʌg→hámbəg 'humbug', wíndou→wíndəu 'window'.

黒人英語で語尾が子音＋l である場合，[apʊl] 'apple', [lɪtol] 'little' のように子音と l の間に母音を入れるのは，Old English が æppel, lȳtel のように母音を入れて発音していたからではない。又，白人の英語でも [æpəl], [lɪtəl] のように Schwa を挿入する発音もあるが，音節をはっきりさせる為に母音を入れて発音しようとする考えが話し手にある訳でもないだろう。母音挿入は特に黒人英語に見られる。黒人英語では [apʊl], [lɪtol] や [panapʊl] 'pineapple', [hʌmbʊl] 'humble' のように，日本語が借用語に適用するような規則である母音を挿入しているが，自由変異も多い。黒人英語の一般的な母音挿入規則は次のようになる。

$$\text{d}.\ \phi \longrightarrow \begin{bmatrix} +\text{mid} \\ -\text{front} \\ \alpha\text{central} \end{bmatrix} / \begin{bmatrix} +\text{anterior} \\ +\text{coronal} \\ \alpha\text{central} \end{bmatrix} \text{——} \begin{bmatrix} +\text{vocalic} \\ +\text{consonantal} \\ +\text{anterior} \end{bmatrix}$$

この規則は，t と l の間に [o] を挿入し，d と l の間 [ə] を挿入するものである。

ɪtl→lɪtol, batl→batol, mɪdl→mɪdəl, kændl→kændəl

$$\text{e}.\ \phi \longrightarrow \begin{bmatrix} +\text{mid} \\ -\text{front} \end{bmatrix} / \begin{bmatrix} +\text{anterior} \\ -\text{coronal} \end{bmatrix} \text{——} \begin{bmatrix} +\text{vocalic} \\ +\text{consonantal} \\ +\text{anterior} \end{bmatrix}$$

唇音と l の間に [o] を挿入する。

nɪpl→nɪpol 'nipple', pipl→pipol 'people', grʌmbl→grɔmbol 'grumble', tebl→tebol 'table'.

[apʊl] とか [lɪtol] のような発音がなく，[apʊ], [lɪto] のように常に母音で終る発音しかしない者には，d, e のような母音規則よりもむしろ，l が母音に変わる規則が妥当であろう。全く [l] を発音しないで，/sil/→[siu] 'seal' のように母音の次の [l] も母音に変える者は，母音を挿入してから l を消去すると考えるよりも，置換規則が頭にあるはずである。

Luelsdorff（1975年，62ページ）は語尾に来る l がどの母音になるかは，高位母音の次か非高位母音の次か，円唇母音の次か非円唇母音の次かによって決められると述べている。これは母音調和によるものである。

I．V——#

peel [piʉ], pool [puu^], fail [feʏ], mole [moo^], pal [pæʏ], ball [bɔo], file [faʏ], gull [gəʏ].（ʏ は後舌，中位，非円唇母音である）

II．V——C#

field [fiɹd], fooled [fuu^d], failed [feɹd], cold [koo^d], called [kɔod], filed [faɹd].

Ⅲ. C——#

needle [nidɹ], noodle [nudɹ], pickle [pikɹ], hickle [nukɹ], ladle [ledɹ], medal [mɛdɹ], paddle [pædɹ], bottle [badɹ], knuckle [nəkɹ].

Luelsdorff の Ⅰ, Ⅱ, Ⅲで述べた l の母音化による母音調和規則は，次のようにまとめられるだろう。

$$\text{f.}\ \begin{bmatrix}+\text{vocalic}\\+\text{consonantal}\\+\text{anterior}\end{bmatrix}\longrightarrow\left\{\begin{array}{ll}\begin{bmatrix}\alpha\text{high}\\-\alpha\text{mid}\\+\text{back}\\\beta\text{round}\end{bmatrix}/\begin{bmatrix}\alpha\text{high}\\\beta\text{round}\end{bmatrix}___(\text{C})\#&(\text{i})\\\begin{bmatrix}\alpha\text{high}\\-\alpha\text{mid}\\+\text{back}\\-\text{round}\end{bmatrix}/\text{C}___[\alpha\text{high}]\#&(\text{ii})\end{array}\right\}$$

ⅠとⅡの語には f の(i)の規則が適用され，Ⅲの語には f の(ii)が適用される。($-\alpha$mid) は，前の母音が高位母音の場合 α が＋であるから，[－×＋mid] で [－mid] となり，前の母音が高位母音でない場合は α が－であるから，[－×－mid] で [＋mid] となる。

英語の母音は音素面ではすべて有声音である為，日本語のように無声子音が母音間で有声化して当然のようであるが，黒人英語も白人の英語もその例が以外に少ない。白人の英語では歯茎音の閉鎖音が母音間では弾音 (flap) になり，無声子音 /t/ が有声弾音 [ɾ] に発音されるが，黒人英語では /t/ が [d] に発音される。

bɛtər→bɛdə 'better', bato→bado 'bottle', fætɪs→fædɪs 'fattest'.

日本語では，複合語は oogama (<oo＋kama), miyaǰima (<miya＋šima) のように有声化され，adama「頭」, kagasi「かかし」のように破裂音を有声化する方言も多い。標準英語でも waif-z→waɪvz 'wives', wʊlf-z→wʊlvz 'wolves' のように複数形で f が v に発音されるのは，次に有声子音が来る為であり，黒人英語で t が d と発音されるのと同様同化によるものである。

言語の自然性の立場から，出来るだけ白人と黒人に共通の，英語を話す際に起るのが当然であると思われる規則を取り上げ，それが他の言語にも共通する面がある事を述べた。我々は言語間の相違に注目しがちであるが，言語全体から見ると，いかに各言語が似ており，又，影響し合っているかが分るのである。そして一方では，各言語がいかに強く，個別言語の特徴を維持し続けているかも分るのである。

5. おわりに

この論文では黒人英語の起源を追求しながら，黒人英語がどのようにして出来たのか，なぜ黒人英語のような言語が生まれ得たのかを述べた。そして，黒人英語が出来た背景には，言語の自然性に関るさまざまな要素があり，言語の普遍的な立場から見ると，黒人英語にはかなり他の言語との共通点が見られることも述べた。今後黒人英語はどのように変わっていくかであるが，いくらか教育の向上，テレビ，ラジオの普及があっても，標準英語のようになる事はないだろうし，黒人英語と良く似ていると思われている南部方言と全く同じになる事もないだろう。確かに，標準英語の文法を理解し，それを話せる黒人が増えている。しかし，すべての黒人が標準英語を話せるようになったとしても，黒人英語はある地方，ある家庭で依然として残り続けるだろう。それは方言と同じであって，ある地方では皆が標準英語を理解し，話せても，そこの方言は，時代と共に多少の変化をしつつも，変らずに話され続けていくのである。

参 考 文 献

Banfield, A. W. and J. L. Macintyre. *A Grammar of the Nupe Language Together with a Vocabulary*, Richard Clay & Sons, Great Britain, 1915.

Burling, Robbins. *English in Black and White*, Holt, Rinehart and Winston, 1973.

Dillard, J. L. *Black English*, Random House, 1972.　小七友七訳『黒人の英語』研究社，1978.

_____(ed.). *Perspectives on Black English*, Mouton, 1975.

_____. *Lexicon of Black English*, The Seabury Press, 1977.

Elson, Benjamin and Velma Pickett, *An Introduction to Morphology and Syntax*, Summer Institute of Linguistics, Santa Ana, California, 1967

Ficket, Joan G. "Ain't, Not, And Don't in Black Black English", *Perspectives on Black English*, pp. 86-90, 1975.

Harrison, J. A. "Negro English", *Peropectives on Black English*, pp.143-195, 1975.

石橋幸太郎他（編）.『現代英語学辞典」成美堂，1975.

小林泰秀.「幼児言語の音韻論的研究(1), (2)」『広島女学院大学論集』第25集，第27集，1975, 1977.

Labov, Williaw. *Language in the Inner City*, University of Pennsylvania, 1972.

Luelsdorff, Philip A. *A Segmental Phonology of Black English*, Mouton, 1975.

大塚高信(編).『新英文法辞典』三省堂，1970.

『新英和大辞典』研究社，1971.

Schokey, Linda. *Phonetic and Phonological Properties of Connected Speech*, Ph. D. Dissertation, The Ohio State University, 1973.

Stewart, William A. "Continuity and Change in American Negro Dialects", *Perspectives on Black English*, pp. 223-247, 1975.

Wise, C. M. "Negro Dialect", *Perspectives on Black English*, pp. 216-221, 1975.